

第三章 明石の物語 桂院での饗宴

[第一段 大堰山荘を出て桂院に向かう]

またの日は京へ帰らせたまふべければ(翌日は京へお帰り為さる予定なので)、すこし大殿籠もり過ぐして(少しゆっくりと朝を過ごして)、やがてこれより出でたまふべきを(それから光君は此処から帰途に着く御心算で居らしたが)、桂の院に*人びと多く参り集ひて(桂院に多くの人たちが集まって来ていて)、ここにも殿上人あまた参りたり(この山荘まで高官たちが桂院での祝宴の迎えに何人も遣って来たのです)。*此処で言う桂院に集まった「人びと」は光君の部下たる政府の役人らしい。山荘まで押し掛けた殿上人(てんじゃうびと)は帝の居殿である清涼殿への昇殿を許された高官だが、上達部(かんだちめ、大臣閣僚)ほどの貴人ではなく、高級官僚くらいようだ。ところで、問題は私事が公務の催事のように大袈裟になってしまっている事である。この事態には紫の上の嫌がらせも感じるが、もしかすると桂院は主に催事場か宴会場として使う別荘だったのかも知れない。もはや、このまま二条院に帰ったのでは収まりが付かなくなってしまっているらしく、光君は桂院へ向かうようだ。

*御装束などしたまひて(そこで光君は部下たちに面会する手前に止む無く正装で身支度なさって)「いとはしたなきわざかな(全く見つともない事態だ)。かく見あらはさるべき(このように衆人の目に曝されて良いような)*隈にもあらぬを(隠れ里ではないのだが)」とて(と愚痴を言って)、*騒がしきに引かれて出でたまふ(賑やかな出迎え衆の一行に煽られて桂院へ向かいなさいます)。*「隈(くま)」は物理的に<日陰、暗がり>を示すこともあるが、此処ではやはり<隠れ家>の意だろう。だとすると、「隈」が「見あらはさるべき(露わになっても良い)」「にもあらぬを」なのは自明過ぎる。いや、この否定文は「隈」なれば「見あらはさるべきにもあらぬを」という意の倒置。これは今日でも、会話では良く使う言い方だろう。*「騒がしきに引かれて出でたまふ」は絵本、は実際には無いが、の説明文のつもりで言い換えた。

心苦しければ(この気忙しい出発では別れの挨拶も落ち着いて出来ず心苦しくて)、さりげなく紛らはして(そんな急には帰り支度が整わないような間諛付いた振りをして)立ちとまりたまへる戸口に(光君が立ち止まりなさる戸口に)、乳母、若君抱きてさし出でたり。あはれなる御けしきに(可愛らしい姫君の御姿に)、かき撫でたまひて(思わず光君はその頭を撫でなさって)、

「見では(会えないと)、いと苦しかりぬべきこそ(とても辛くなるだろうというのは)、いと*うちつけなれ(ただこの場の思いに過ぎない)。いかがすべき(将来を考えて育て方を決めなければならぬ)。いと里遠しや(とても此処の山里は京からは遠いからな)」*「打ち付け」は<突然>や<思い付き>とあるが、語感は<場当たり>だろうか。

とのたまへば(と仰ると)、

「遥かに思ひたまへ(遠くに思い申し)絶えたりつる年ごろよりも(行き来の無かった明石に居た年月よりも)、今からの*御もてなしの(此れからの御教育方針が)、おぼつかなくはべらむは(決まらないようで御座いますのは)、心尽くしに(気が揉まれます)」*「もてなし」は<処遇>。乳母が行う「処遇」は<育て方>で、宣旨の娘の立場は宮廷式教育者。

など聞こゆ(などと乳母は申し上げます)。

若君、手をさし出でて、立ちたまへるを(光君が御帰りになるのを)慕ひたまへば(追うように為さると)、*ついゐたまひて(光君は屈み込みなさって)、*「つい居る」は「つい(ちょっと)」「居る(据わる、座る)」だろうか、<屈み込む、膝を付く>と古語辞典にある。

「あやしう(判断の難しい)、もの思ひ絶えぬ身にこそありけれ(悩みの絶えない立場に私は立っているものだ)。しばしにても苦しや(しばしの別れも辛いぞ)。いづら(君は何処なるや)。など、もろともに出でては、惜しみたまはぬ(なぜ、若君と共に顔を見せて別れを惜しみなさらないのか)。さらばこそ(そうしてこそ)、人心地もせめ(気持ちも通うものを)」

とのたまへば、うち笑ひて(乳母は思わず笑顔になって)、女君に「かくなむ」と聞こゆ。

なかなか(明石君は抜け出しようも無く)もの思ひ乱れて臥したれば(別れの悲しみに暮れて横になっていて)、とみにしも動かれず(すぐ起き上がる事も出来ません)。あまり上衆めかしと思したり(しかし光君は顔を見せない明石君を皇女なみに貴人ぶっていると御思いになりました)。

人びともかたはらいたがれば(女房たちもこのままでは具合が悪くて困ると訴えたので)、しぶしぶにゐざり出でて(明石君はしぶしぶ膝を進めて出て来て)、几帳にはた隠れたるかたはら目(几帳に隠れて端から覗かせた横顔が)、いみじうなまめいてよしあり(何とも情感豊かで品があり)、たをやぎたるけはひ(しなやかな身のこなしは)、*皇女たちといはむにも足りぬべし(皇女たちのようだと言ってみても不足はありません)。*注に<『完訳』は「語り手の推称の言辞。源氏の「あまり上衆」の評と照応」と注す。>とある。文体としては説得力のある注釈のようで、一応は従う。が、「あまり上衆めかし」の対象は特に前振りも無く、今までの物語から推し量れば「葵の上」か「六条御息所」が思い浮かぶ。が、それも特に押すほどの根拠は無い。

帷子(かたびら、几帳の垂れ絹を)引きやりて(引き開いて)、こまやかに(光君が明石君と親密に)語らひたまふとて(御話しなさろうと)、とばかり(少しばかり)振り返りたまへるに(振り向いて御覧になると)、さこそ静めつれ(さすがにじっとしていた明石君も)、見送りきこゆ(顔を出して光君を御見送り申し上げます)。

いはむかたなき盛りの御容貌なり(言い表しようも無い今を盛りの光君の美しい御姿です)。いたうそびやぎたまへりしが(以前はだいぶ痩せそびえて居らしたが)、すこし成り合ふほどに(今は少し背丈に見合う肉付きに)なりたまひにける御姿など(なっていた御姿など)、「かくてこそものものしかりけれ(これでこそ重々しくて立派だ)」と、御指貫の裾まで(おんさしぬきのすそまで、筒袴の裾まで)、なまめかしう愛敬のこぼれ出づるぞ(優美で魅力溢れているというのは)、あながちなる見なしなるべき(明石君の鬚貞目の見立てでしょうか)。

*かの(既に幾度か登場した)、解けたりし蔵人も(かつて右近将監を解任された光君の側近である蔵人も)、還りなりにけり(復職していましたが、)。*靱負尉にて(殿中帯刀を許されて)、*今年*かうぶり得てけり(叙爵していました)。*注に<「須磨」に初出。「濡標」「関屋」にも登場。空蝉の夫伊予介(後、常陸介)の子で河内守の弟。>とある。が、この人物は今を遡る事10年前の葵祭りに先立つ、そ

れこそかの、葵の上と六条御息所との御車争いのあった御禊の日に、帝の使者を勤めた時の近衛大将たる光君の隨身に仕えた、が隨身に仕えるには破格の高官であった右近将監(うこんのじょう、右近衛府の三等官)として、「葵」巻で初登場した蔵人かと思う。そして、この人物は「須磨」巻に於いて、光君側近ゆえに右近将監を解任され、位階昇進も見送られ、失意のまま光君の須磨下向に同行した、と記された。そして「濤標」巻に於いては、光君の住吉御礼参りに参列し、その時の記事に「右近将監も鞆負になりて事事しげなる隨身具したる蔵人なり」とあって、復職を果たして多くの隨身を従えた華やかな姿が描写されていた。そして「関屋」巻に於いて、右近将監が河内守の弟だと明かされた。*「鞆負尉(ゆげひのじょう)」は古語辞典に<衛門府の三等官>とあるが、右近将監(近衛府の三等官)の方が<衛門府の三等官>より格上ではないのだろうか。「鞆負」は<矢筒を背負って宮中を守護した者>ともあるので、<殿中帯刀を許されたもの>と、曲解かも知れないが、考える。*「今年」については、「濤標」巻の住吉参りが2年前で、既にその時点で「鞆負になりて」とは記されていたので、少し意外。*「冠得」は<従五位下に叙せられること。叙爵。>と大辞泉にある。一般役人に於いては殿上人への位階昇進だが、蔵人は六位でも殿上できたらしい。それでも、六位と五位との身分差は正に一線を画したようだ。

昔に改め(その蔵人が明石の頃とは見違えて)、心地よげにて(意気軒昂に)、御佩刀(みはかし、光君の御太刀を)取りに寄り来たり(預かる為に玄関先に近付いてきました)。人影を見つけて(すると見覚えのある女房を見つけて)、

「来し方のもの忘れしはべらねど(昔の事を忘れてはいませんが)、かしこければえこそ(御無礼かと遠慮しておりました)。浦風おぼえはべりつる(明石の海風が思い出されます)暁の寢覚にも(この山荘での今朝の寢覚めにも)、おどろかし(急なご挨拶を)きこえさすべき(申し上げることが出来る)よすがだになくて(手立てすらないもので)」

と、けしきばむを(風情ある挨拶で色気を見せると)、

「*八重立つ山は(此処の山の数々は)、さらに島隠れにも劣らざりけるを(明石の島の数々にも劣らない多様な生き様です)、松も昔のと(高砂の松も昔の友をなくしたように)、たどられつるに(私も相手がいなくて寂しく思っていました)、忘れぬ人もものしたまひけるに(忘れずにいる人も居らしたとは)、頼もし(心強いことです)」 *注に<女房の返事。引歌を多用。「白雲の八重立つ山の峯にだに住めば住まるる世にこそありけれ」(源氏積所引)「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ」(古今集羈旅、四〇九、読人しらず)「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」(古今集雑上、九〇九、藤原興風)。>とある。

など言ふ(などと女房は答えます)。

「*こよなしや(是は教養の程度がだいぶ違うようだ)。我も思ひなきにしもあらざりしを(自分もそれなりに洒落た台詞を言ったつもりだったが)」など、あさましうおぼゆれど(情けない気がしたが)、「今(また)、ことさらに(改めて)」と、うち*けざやぎて(敢えて毅然として何とか武人の体面を保って)、参りぬ(参列に戻って行きました)。*注に<鞆負尉の心中。『完訳』は「鞆負の尉の心語。「こよなし」は、自分の期待とはかけ離れている感じ。古歌を多用する女房の気どった態度に應對しかねる気持」と注す。>とある。「こよなし」は、比較評価に於いて優劣いずれの場合でも<甚だしく差がある>事を意味する語、のようだ。だから、<とても優れている>とか<とても劣っている>との言い換えが古語辞典に示さ

れている。しかし此処では男女の相性の相対評価だから、＜優劣＞を判じるものではなく、＜好き嫌いの程度＞や＜価値基準＞の違いについての判定だが、注釈にあるように韃負尉は女房との教養の違いを感じ、そして「あさましうおぼ」えて完敗したのだろう。*「けざやぐ」は＜はっきりふるまう、きっぱりする＞と古語辞典にある。「さやけし(潔白だ、はっきりしている)」に近い語感のようで、武人らしい＜潔い姿勢＞は＜毅然＞なのだろう。「打ち」は強調語ともあるが、言い換えれば＜わざと＞とか＜あえて＞くらいの語感か。

[第二段 桂院に到着、饗宴始まる]

いと装ほしく(よそほしく、とても麗々しく着飾って)さし歩みたまふほど(進み歩きなさる光君の一行は)、かしかましう追ひ払ひて(大声で先導が人払いをして)、御車の尻に(みくるまのしりに、御車の後座席に)、*頭中将(蔵人の筆頭武官)、兵衛督(ひゃうゑのかみ、兵衛府長官を)乗せたまふ(お乗せでした)。*頭中将や兵衛督は軍や警察を指揮する中枢権力者で、最上層貴族家の師弟が任せられる官職だが、光君は彼らに従える最高権力者だ、と言う描写か。

「*いと軽々しき、隠れ家、見あらはされぬるこそ、ねたう(いとも簡単に隠れ家を暴かれたというのは実に心外だ)」 *「いと軽々しき(に、わざにて)」の省略、と読む。

と(と光君は彼らに)、いたうからがりたまふ(とても残念がりました)。

「昨夜の月に(よべのつきに、昨日の月夜の嵯峨野行に)、口惜しう御供に後れはべりにけると思ひたまへられしかば(残念なことに御供に遅れを取り申ししてしまったと存じましたので)、今朝、霧を分けて参りはべりつる(今朝は早くから朝霧を踏み分けて参りまして御座います)。

*山の錦は(山の紅葉は)、*まだしうはべりけり(まだ早いようで御座います)。*「山の錦」は<秋、山が紅葉した景観を錦にたとえた語。秋の季語。>と大辞泉にある。*「まだしう」は、形容詞「未だし(未だ整わない)」に推量の助動詞「う(であろう、ような)」が付いた連用。

野辺の色こそ(今は野辺の草花の彩が)、盛りにはべりけれ(盛りで御座います)。*なにがしの朝臣の(ただいくら野辺が見事な季節柄とはいえ同僚のかの者は)、小鷹にかかづらひて(大堰の野原で鷹狩りに取り掛かって)、立ち後れはべりぬる(御供への出発に遅れていましたが)、いかなりぬらむ(どうしていますやら)」 *注に<実名を言ったのを「某朝臣」と語り手が言い換えたもの。>とある。如何にも肯ける所だ。実名で無ければ話がつまらないし、光君に対して失礼だろう。

など言ふ(などと部下は話します)。

「今日は、なほ桂殿に(ずっと桂殿に留まろう)」とて(光君は興に乗って)、そなたざまに(一席設ける趣向で)おはしましぬ(桂院に御着きになりました)。にはかなる御饗応と(おんあるじ、御宴席があると)騒ぎて(準備に大騒ぎとなって)、鶺鴒ども召したるに(鶺鴒たちを呼び出しなされると、その打ち合わせの方言に)、海人のさへづり思し出でらる(光君は明石の漁師たちの話しっぷりを思い出さいます)。

野に泊りぬる君達(大堰の野原に留まって鷹狩りに興じた公達が)、小鳥しるしばかりひき付けさせたる荻の枝など(雉を仕留め損なってか小鳥を鷹狩りの成果のしるしばかりに括り付けさせた荻の枝などを)、苞(つと、土産)にして参れり(遣って参りました)。大御酒(おほみき、御酒の大盃)あまたたび(何度も)順(ずん、順番)が流れて(回ってきて)、川のわたり危ふげなれば(川遊びは危なっかしいので)、酔ひに紛れておはしまし(酔いに任せて院内で宴会を続けなかり)暮らしつ(一日中過ごされました)。

[第三段 饗宴の最中に勅使来訪]

おのおの*絶句など作りわたして(作り連れ合うなどして)、月はなやかにさし出づるほどに(月が明るく差し出した頃に)、大御遊び(おほみあそび、大合奏会)が始まりて、いと今めかし(今の権勢そのままにとても華やかです)。 *「絶句(ぜっく)」は辞書に<漢詩の近体詩の一種で、起・承・転・結の四句からなる定型詩。>とある。

弾きもの(弦楽は)、琵琶、和琴ばかり、笛ども上手の限りして(吹奏も選ばれた名手だけで)、折に合ひたる調子吹き立つるほど(この場に相応しい曲を演奏していると)、川風吹き合はせておもしろきに(川風が調子を合わせるように良い風情で吹いて)、*月高くさし上がり、よろづのこと澄める夜のやや更くるほどに、殿上人、四、五人ばかり連れて参れり。 *「月高く」なる時刻だが、十三、四夜とすれば22:00~24:00の間ざっと夜の11時くらいだろうか。

上にさぶらひけるを(彼らは御所に伺候していたが)、御遊びありけるついでに(音曲遊びの際に帝が)、

「今日は、*六日の御物忌(むいかのおんものいみ、六日間の帝の厄除け謹慎)が明く日にて(明ける日なので)、かならず参りたまふべきを(内大臣は必ず参内なさるはずなのに)、いかなれば(どうしているのか)」 *「物忌」は<厄除け謹慎>だろうが、注には<冷泉帝の詞。『集成』「中神の物忌であろうかとされる。五日か六日連続するゆえんである。「御物忌」とあるのは、帝の物忌である」と注す。>とある。「中神(なかがみ)」は「天一神」とも表記されるようで、「纂木」巻の「紀伊守邸への方違へ」の口実にも使われていたが、大辞泉には<陰陽道(おんようどう)で、八方を運行し、吉凶禍福をつかさどるとされる神。己酉(つちのととり)の日に天から下り、東・西など四方に5日ずつ、北東・南東など四隅には6日ずついて合計44日、癸巳(みずのとみ)の日に正北から天に上って16日間天上にいて己酉の日に再び下って前のように遊行する。この神の遊行の方角を塞(ふた)がりといい、その方角に向かう場合は、方違(かたたが)えをする。てんいちじん。>とある。

と仰せられければ(と仰せあそばされましたが)、ここに(大臣がこの桂院に)、かう泊らせたまひにけるよし聞こし召して(このように御滞在なさっている知らせを帝が御聞きに為られて)、御消息あるなりけり(御手紙を御遣わしなされたのです)。御使は、*蔵人弁なりけり。 *「くらうどのべん」の字面の意味は<近侍の文官>かもしれないが、実際には若手の最上位貴族の中の筆頭文官たる「頭弁(とうのべん)」に匹敵する人物なのだろう。既に頭中将も此処に居るので若手官僚の勢ぞろいであり、御所の手薄が心配になるほどの光君の権勢振りである。

「月のすむ川のをちなる里なれば、桂の影はのどけかるらむ (和歌 18-12)

「月のきれいな桂川、さぞお似合いのことでしょう (意識 18-12)

*注に<帝の歌。「住む」と「澄む」の掛詞。『完訳』は「土地ぼめをして源氏をたたえる」と注す。>とある。不親切な注釈だ。「月の住む」が何を意味するのか示されていない。「桂」に何かしらの謂れが在るに違いないので少し検索したが手応えが無く、大辞泉に「桂男(かつらをとこ、月に住むという伝説上の男。また、月の異称。かつらお。美男子。)」と言う語が紹介されていたので、是を頼る。因みに月桂樹の「月桂(げっけい)」は<中国の伝説で、月に生えているという木。かつら。>と大辞泉にあり、<月。また、月の光。>ともある。おそらく帝は光君を桂男に見立てた、のだらう。また、「をち」は<遠方、かなた>とあり、<遠い昔>であり<遠い将来>でもある。「影」は<月の光>と<桂男の姿>。「のどか」は<穏やかな風情>と<寛ぎ>。で、この歌のA面は<月が澄んで映る川沿いの山郷なので桂院はさぞ穏やかなことでしょう>で、B面は<桂は美男子の故郷なので其処へ帰った光君はさぞ寛いでいるのでしょうか>となる。

うらやましよう

とあり。かしこまりきこえさせたまふ(光君は帝の御歌を畏まって承り申しなさいます)。

上の御遊びよりも(使者たちは御所での音楽会よりも)、なほ所からの(やはり風情ある桂の場所柄でしょうか)、すごさ添へたる(実に身に沁みる)ものの音をめでて(演奏を賞賛して)、また酔ひ加はりぬ(さらに酔い痴れました)。

ここには*まうけの物もさぶらはざりければ(此処には使者への褒美の品も用意していなかった)、大堰に(光君は大堰山荘の明石君に)、「わざとならぬまうけの物や(何か適当な使者への褒美の品はないか)」と(と早馬で)、言ひつかはしたり(言い遣わしなさいました)。取りあへたるに従ひて参らせたり(明石君は取り敢えず手近な品を遣いの者に持たせて遣しました)。衣櫃二荷にて(きぬびつふたかけにて、その品々は衣装箱の二担ぎで)あるを(あつたが)、御使の弁はとく帰り参れば(御使者の蔵人弁はすぐに御所へ帰り参るとのことなので)、女の装束かづけたまふ(光君は次の返歌を託して女物の衣服を下げ与えなさいます)。*「設け」は宴席の<準備、用意、支度>または<ごちそう、食物>と古語辞典にある。ということは「まうけの物」は<宴席の客に持たせるために用意した記念品>となって<引出物>に違いない。ただ、今日で言う「引出物」は<招待客のために用意した記念品>という意味で、社会様式の変化の所為か<使者に与える記念品>というのはその概念自体が無い。仮に、使用人に記念品が有ったとしても其れは<お流れ>であり、此処で言う「設けの物」とはまた少し違うだろう。そこで平易に考えて、今なら遣いの者に上げるとすれば<御礼の品>だが、そこに身分差を加味して<褒美の品>とした。

「久方の光に近き名のみして、朝夕霧も晴れぬ山里」(和歌 18-13)

「月の桂は名ばかりの、朝夕霧も晴れぬ山里」(意識 18-13)

*「久方の」は<「天(あめ・あま)」「空」「月」「雲」「雨」「光」「夜」「都」などにかかる枕詞。>と大辞泉にあり、掛かり方や語義は諸説あって定説が無いともある。ならば、<遠くの>や<久しぶりの>という語意も否定されてはいないワケだ。で、「久方の光に近き」を<久々に故郷へ帰った>と解して、桂男の伝説に符合させる事もできそうだ。とはいえ、この歌を平易に雑感すれば<美しい月光に似通う桂と言う地名ですが、此処は霧深い山里です>という桂院の価値および光君自身の評価に於ける謙遜には見える。また、「久方の光」には<崇高で簡単には得

難い恩恵>という語感があるから、「久方の光に近き」という言い方は<忝くも大君の御歌を拝し申して>という敬意の婉曲表現かと思ったが、もっと明確に<久しぶりの上の行幸にも御近くです>という御案内らしい。いずれにせよ、それが「朝夕霧も晴れぬ山里」に掛かっては失礼に過ぎるので、あくまでも独立の語句で謙譲の枕として意図したのだろう。しかし、当歌の本意は<御所に近いからといって桂川沿いの此処ら辺りの山里では日常の事が上手く進まない>であることが、後の記述から次第に分かる。

*行幸待ちきこえたまふ心ばへなるべし(光君は帝の桂院行幸を御待ち申しなさる御意向だったようです)。 *注に<「なる」断定の助動詞。「べし」推量の助動詞。語り手の言辞。『集成』は「作者の自注。草子地」。『完訳』は「語り手の推測」と注す。>とある。

「*中に生ひたる(田舎で育つ)」と(と光君は古歌を)、うち誦んじたまふついでに(口ずさみなさりながら)、 *注に<「久かたの中に生ひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる」(古今集雑下、九六八、伊勢)。詞書に「桂に侍りける時に、七条の中宮の間はせ給へりける御返事に、奉れりける」とある。>とある。また、Webサイト「ミロール倶楽部」の「古今和歌集の部屋」の解説に、この詞書の意味は<月に桂があるという言い伝えを元に、ここで詠われているのは伊勢自身や桂の場所のことではなく、桂の家にいる伊勢の子供のことである。>とある。なので、引歌の大意は<我が子は長い田舎暮らしの桂育ちなので帝の御加護を頼るばかりになりそうです>となりそうだ。それこそ、「久方の」「里」「光」は「桂」の縁語なので、風情を出す技巧として詠み込んだもので、その語自体に過度の思い入れを読むべきではない、ように思う。それに、光君の今の懸案が<姫君の教育方針>であることは既に明示されている。

かの淡路島を思し出でて(明石の海辺で見た淡路島を思い出しなさって)、*躬恒が(みつねが、歌人の凡河内躬恒が)「所からか(月の景色の違いは見る場所の違いからか)」と*おぼめきけむことなど(予想以上の立場の違いの実感に感嘆したようなことなどを)、のたまひ出でたるに(仰り出したので)、ものあはれなる酔ひ泣きどもあるべし(若手官僚の中にはものあわれを感じ入って酔い泣きする者も居たようです)。 *注に<「淡路にてあはとはるかに見し月の近き今宵は所がらかも」(新古今集雑上、一五一五、凡河内躬恒おほしかふちのみつね)の和歌。>とある。この歌は宮中での月詠みの歌らしく<淡路では嗚呼何と遠いことかと見た月が今夜は雲上にいる所為か近く見える>と、地方官と中央復帰での心情の違いを表したものの、ようだ。光君の事情と被る。 *「おぼめく」は<はっきりしない、訝しく思う、空惚ける>と古語辞典にあるが、此処では<予想以上の実感に戸惑う>ないし<戸惑って見せた>くらいの意味だろう。

「めぐり来て手に取るばかりさやけきや、淡路の島のあはと見し月」(和歌 18-14)

「月が明るく見えるのは、島の蔭より雲の上」(意識 18-14)

*是が、光君が「のたまひ出でたる」「躬恒が所からかとおぼめきけむことなど」なのだろう。なるほど躬恒の歌そのままに、語句を並び替えたものようだ。が、わざわざそんなことをする意図は、やはり在るだろう。躬恒は自らの境遇の違いを実感を持って表現したのだろうが、光君が見る月は<姫君>に違いない。「めぐり来て」は、躬恒同様に瀬戸内を見た光君なら<復権して>も実感できるだろうが、娘の将来を<考えめぐらした結果>こそが今の気持ちだろう。通せば、<考えてみれば姫に手で英才教育を施すべきなのは当然だ、明石の田舎育ちのままで嘆息していて良い筈が無い>と教育方針が固まった表明となっている。躬恒の歌意は、むしろその方針決定が明石君に及ぼす厳しさを風情で和らげた工夫、かと思う。

頭中将、

「浮雲にしばしまがひし月影の、すみはつる夜ぞのどけかるべき」(和歌 18-15)

「利根の川風袂に入れて、月に棹差す高瀬舟」(意識 18-15)

*注に<頭中将の唱和歌。「浮き」と「憂き」、「澄み」と「住み」、「夜」と「世」の掛詞。源氏を「月影」に喩える。>とある。「まがふ(紛ふ)」は<入り乱れる、見間違ふ、見失う>と古語辞典にある。「すみはつ」は「澄み果つ」ならく澄み切る>、「住み果つ」は<添い遂げる>または<死ぬ>。いくつか深読みも出来そうだが、頭中将の立場では深入りは憚られる所だろうから、情景詠みの<偶々浮かんだ雲に暫く紛れていた月光は澄み切った今夜こそ伸び伸びと照り輝くことでしょう>を、そのまま光君の心情として推察申し上げた、という事で良いだろう。というわけで、意識はこの場の<ノリ>を汲んだ、心算。

左大弁(同席していた筆頭書記官は)、すこしおとなびて(少し年配で)、故院の御時にも(亡き父院の代から)、むつまじう(光君に親しく)仕うまつりなれし(仕えて来ていた)人なりけり(人で、次のように唱和しました)。

「雲の上のすみかを捨てて夜半の月、いづれの谷にかけ隠しけむ」(和歌 18-16)

「あれを御覧と指差す方に、利根の流れを流れ月」(意識 18-16)

心々にあまたあめれど(その他にも同席者の唱和はそれぞれに多数在ったようですが)、うるさくてなむ(この辺にしておきます)。

気近ううち静まりたる御物語(親しい者たちと小さく囲んだ御話もして)、すこしうち乱れて(すっかり打ち解けて)、千年も(ちとせも、いつまでも)見聞かまほしき御ありさまなれば(話し込んでいたい心持ちで)、斧の柄も朽ちぬべけれど(囲碁見物の木こりの斧の柄も朽ちてしまいそうでしたが)、今日さへはとて(四日目の朝となってはさすがに)、急ぎ帰りたまふ(光君は二条院に急ぎお帰りなさいます)。

物ども(帰りの行列が多く土産物を)品々に*かづけて(身分に応じて頭に押し頂いて)、霧の絶え間に立ち混じりたるも(朝霧に見え隠れして進むのも)、前栽の花に見えまがひたる色あひなど(庭先の花々に見間違ふような色合いで)、ことにめでたし(特に華やかです)。*「かづく」は古語辞典に<頭に物を冠する意>とあり、その姿から<潜る>意味の「潜く」という表記もある。此处では本来の<頭を下げて物を押し頂く>意味の「被く」だが、<いただく、引き受ける>とは反対の<あたえる、転嫁する>の意味でも使われるらしい。それでも全体の文意を汲めばこの場面では恐らく、「かづく」の原義そのままに、部下の供人が土産物を<頭に押し頂いて>いるのだろう。明石君が寄越したのは女物の衣装で色鮮やかだっただろうし、其れは入道受領の財力の賜物だった。

*近衛府の名高き*舎人(近衛の名物衛士で)、*物の節どもなどさぶらふに(節句の音頭を取る者たちなどが中に居たので)、さうざうしければ(一節謡わせないと詰まらないと)、*「近衛」は華美を競う。武官は敵の標的を覚悟して武具や鎧を派手に作る。装束に制約の多い貴族の階級社会において、武官だけ

は飾り立てるお墨付きを得ている、というか、目立つ事が義務とされる。孔雀である。平和が続いてもこの建前は変わらない。しかし、派手な男前に対する実需は戦闘ではなく舞踏へと変化する。そして、その実需は内裏まで武具装着を許される特権貴族の近衛に集中する。斯くして近衛の格式ある芸能人化は進む。*「舎人(とねり)」は<律令制で、皇族や貴族に仕え、護衛・雑用に従事した下級官人。内舎人(うどねり)・大舎人・東宮舎人・中宮舎人などがあり、貴族・下級官人の子弟などから選任した。>と大辞泉にある。*「物の節」は<近衛府の舎人(とねり)で、特に雅楽に長じた者。春日祭・賀茂祭などに奉仕した。>と大辞泉にある。

「*其駒」など乱れ遊びて(お開きの神楽である「其駒」などを儀式と違って何人もで遊び演奏する彼らに)、脱ぎかけたまふ色々(光君や高官たちが脱いで褒美に与えなさる上着の色々が)、秋の錦を風の吹きおほふかを見ゆ(秋の紅葉を風が吹き散らすように見えました)。*「其駒(そのこま)」は注に<神楽歌の一曲。神の還御を送る歌。>とある。歌詞は、神が乗るのか使者なのか馬に水や餌を与える>という内容のようだ。少しWeb検索すると、富山県の四方神社「梅彦二百年祭記念大祭式典」のレポート・ページに「其駒」の演目意義が解説されていた。ページには、「其駒」はメの演目で行事の代表者が一人舞いをする、とある。最後の演目で盛り上がる、とも記されていたが、一人舞いの演奏なら普通は大合奏、大合唱はしないだろうと勝手に決め付けた。そして、しかし此处では大合奏で「乱れ遊び」した、と読んだ。

ののしりて帰らせたまふ響き(宴の華やぎのままに大騒ぎでお帰りになる光君一行の物音を)、大堰にはもの隔てて聞きて(大堰山荘の明石君は遠くに聞いて)、名残さびしう眺めたまふ(名残も寂しく嘆息なさいます)。「*御消息をだにせで(後朝の文さえ出さずに居て)」と、大臣も御心にかかれり。*「御消息」については、注に<『完訳』は「明石の君への後朝の文」と注す。>とある。